有島武郎の創作方法（上）

――『宣言』から『迷路』へ――

内田　満

1　作家としての自覚の披瀝

――『宣　言』

有島武郎が作家として自覚的に創作活動をはじめたのは大正四年、38歳の春である。[1] 処女作『かんかん虫』執筆の時期を明治39年[2]とすると、この年はそれから10年目にあたる。雌伏の期間として10年はいかにもながいが、じつはそれでも、作家としての出発は有島自身のもくろみよりは早くやってきたのである。

大正3年の春、彼は親しい友人に、

〈僕も四十までは今の境遇に我慢するが、その年になつたら縦令親父存命と雖も狩太に引込み度いと思つて居る。僕は段々と心底からその必要と楽しみとを感じて来て居る。僕は謹んで内部から物の静かに成熟し結果するのを待つて居る。[3]〉

と書き送っていた。〈狩太に引込み度い〉というのは、札幌農科大学の教職を離れて農場に移り、そこで創作にうち込みたいという希望である。教職辞任は早くから彼の希望であったが、父武の意に背くことをおそれて切り出しかねていた。ところが、その秋、妻安子が結核でたおれた。彼女にとって北海道の冬は耐えられないというので同年11月下旬、一家はあわただしく東京に移り、安子は鎌倉に転地した。ついで翌年2月10日までの間に平塚の杏雲堂病院に彼女を入院させている。妻の病臥・転地・入院というなりゆきから、5歳・4歳・3歳の男児三人が武郎の養育にゆだねられることになり、父もやむをえず彼が教職から離れることを許した。

大正4年3月11日夜、有島は東京を発って札幌に向かい、4月1日朝に帰京している。札幌行の目的は、発病した妻をかかえてあわただしく上京したままになっていた農科大学教官としての生活に区

切りをつけ、残務を整理するとともに、親しい誰彼にあらためて別れのあいさつをすることであった。瀬沼茂樹氏は、有島は〈大正四年三月二六日、文官分限令第十一条第一項第四号の規定により休職を命ぜられ、二年後の大正六年三月二五日に休職が満期となって自然退任〉になったとしている。[4] 3月25日付の安子宛書簡に、〈昨日は朝、校内をめぐりて、知れる誰れ彼れに別れを告げ、午後よりは黒百合会の人と写真し、夜は有合亭の同窓会に列しぬ。[5]〉とあることを考え合わせると、彼が休職願を出したのはこの24日ではないかと思われる。こうして生涯の転機を画した彼は、帰京後、その心境と、〈愈々浪人となつた。今後の事は自分でも知らない。勉強しなければならぬと思つて居る。[6]〉と友人に書き送っている。かねての願いがかない、束縛が一つ解けた。しかし、ここに読まれるのは解放がもたらしたはずむ心ではない。それが予期せぬ時期に突然やってきた、という戸迷いだけでもない。あれほど〈必要と楽しみとを感じて来〉た作家としての出発が現実のものになったのであるが、その時彼の前には、自分はいま何をすべきなのか、自分にいま何ができるのか、そういうつかみどころのない不安がぽっかりと口をあけていたのである。ようやくたどりついた作家としての首途は、彼にはまず〈浪人〉の実感であった。

〈安楽に始まつた僕の生涯に一転機が来た様にも思ひます。僕は恐ろしい然し屈しない丈けの気力を持つた期待でそれを見つめてゐます。[7]〉

〈浪人〉になって二カ月ばかり後、こんどは札幌の友人にあててこう書いている。この時彼は、作家としての第一作――教職を離れてはじめての創作――『宣言』の稿を手さぐりしながら書き進めていたのであった。生涯の〈転機〉を迎えた彼には、不安な前途に向かって出発する〈宣言〉がまず必要であった。

作品『宣言』は、その年の7月と、10月から12月までの延べ4回にわたって「白樺」に掲載された。[8] 東京の大学で生物学を専攻して知り合った二人の学生AとBの間にとりかわされる書簡体の小説である。葉書や電報も入れると全部で37通の書信によって構成されているが、前半は回数・枚数ともに圧倒的にAからBへのものが多く、後半は、Bの仙台行きまではA、Y子の仙台行きまではB、終局部ではAがそれぞれ多くを書き送っている。そしてその繁簡がそれぞれ、プロットの生起・継続・展開・破局に見合っている。山田昭夫氏は、AとBの記名の仕方に着目して、〈AはB宛の手紙にいつでも《B兄》と記し、Bが《A兄》と書いた手紙は二通しかない〉ことをあげ、〈Aに対するBの精神的知的優越〉を指摘したうえで、BがAに対して《A兄》と書いている二通の手紙が重視される、と考えを進めている。その一つは〈一九一四、二、七〉の短信、

もう一通はその二日後に書かれた本篇中最長の書簡である。〈二、七〉の短信はN子に対する結婚申し込みを取り消してほしいと乞うたもので、〈そこでBはAに対するプライドをわれから破砕している〉こと、もう一通はBがY子に対して〈心の delicacy〉を感じさせた経過など、〈重要事項が数多く詰めこまれ〉たものである[9]と言っている。その二通はいずれも後半の第二期に含まれるもので、展開部の重要な位置を占めており、やがてY子が〈宣言〉にふみ切る条件を醸成する作中の契機を引き当てたものと言えよう。

この作品がAの書簡に始まってAの書簡に終わる構成になっていること、作品の前半がほとんどAの一方的な独白であってその視点から描かれていること、シチュエーションがAの恋愛から失恋に至る組み立てになっていること、武者小路実篤の『友情』がこの作品と似ていることからくる類推などいくつかの徴憑によって、主人公はAであるとする一連の解釈がある。本多秋五氏は、この作品は〈恋人の心がすぐれた友人の方へ移るのを男らしくたへるといふテーマ〉を描いたもの[10]、と読んだし、野島秀勝氏は、その内容からみて〈失恋小説といった方がふさわしいかもしれない[11]。〉と書いている。たしかに、〈僕の生活に或る不思議な回転期が来たやうだ。〉というAの第一信の言葉はそのまま当時の作者自身の肉声を思わせるし、〈一度思ひつめた僕は、性質として、成るにしろ成らぬにしろ、徹底しないではいられなかつた。〉というその性格設定にも、Aは作中の一分身であることを超えて作者と血のかよった存在であることをうかがわせるものがある。

一方、小坂晋氏は、この作品の主題は〈友情や婚約という「智的生活」を敢えて犠牲にして霊肉一致の恋愛である「本能生活」に生きるBとY子の姿を描くことにあった[12]。〉と、およそ対照的な見方を示している。Aの思慕の対象であるY子、Aの親友であるBが、それぞれ自己に忠実であろうとして友情や婚約をふみこえたのは、有島がのちに『惜みなく愛は奪ふ』で開示した〈智的生活〉から〈本能生活〉への飛躍を示す先駆的な行為であるとするのである。この見方に立てば、Y子とBが主人公だということになる。

はやく鑓田研一氏は、〈(この作品は)新鮮な感情と奔騰する熱情が盛られ、その中を明敏な知性が一条の白金線のやうに貫〉く高い思想性を備えた作品である、と評していた。恋に破れて黎明の太陽を見つめるAの心には〈一種の悲壮美〉があり、恋の勝利者であるBとY子の心にも〈間近に迫つた肉体的破滅が同じ美を添へてゐる〉。この精神的な悲壮美は、A・B・Y子三者それぞれの〈歪められない感情の健康性〉によって高められている[13]、と包括してとらえている。安川定男氏もまた、鑓田説を肯定しつつ、この作品は〈近代的個人主義の自覚を前提として始めて提起された運命的な恋愛と友情

との葛藤〉を追求した作品であるとして、三者のかかわり合いそのものの中に主題が提示されているとみなしている。[14]

山田昭夫氏は、新しくY子主人公説をうちだした。氏は、従来それが定立しにくかった原因として、この作品がA・B二人の往復書簡という形態をとっているためにY子が間接叙法によって描かれていてどこか肉付けのたらぬ形象に傾いていることをあげたうえで、

〈しかし、いうまでもなく、A・Bの文面の大半を占有しているのはY子であり、この場合の三角関係に結着をつける決定権を握っているのはY子だから、彼女こそ主役中の主役である。[15]〉

と主張している。氏はその根拠として、(1)作中〈宣言〉の執行者はいつでもBであるが、真の宣言の実行者はBに対してそれを依頼したY子であること、(2)作者がこの作品の創作意図を〈新しい自分といふものと、新しい女の意識に目覚めて行く一人の処女――そして其等に対して可成勇敢な処女を書きたいと思ひました。〉と語っていること、などをあげている。

わたくしもまた、Y子が〈主役中の主役〉だと考えるので、山田説を小補する形でこの点にふれておきたい。氏の指摘の通り、この作品において〈宣言〉の持つ意味は大きい。氏はさきに、近代作家叢書「有島武郎」において作中〈宣言〉の語の用いられている二カ所をあげ、〈「宣言」の執行者はいつでもBである。Aはいつでも「宣言」を待つ受身の人間である。[16]〉と書いていた。新見では、そのBの背後にはY子の存在と働きかけがあるところから、実質的な宣言者はY子である、とその考えを発展させたのである。ところで、ここに引かれた二つの宣言のうち〈一九一四・二・一四〉付書簡中のものはAがすかさず反論しているように、真実の現れることを封じるための〈嵩にかゝつた〉偽りの揚言であり、終局直前の〈一九一四・二・二一〉付書簡中のものは被宣言者Aから慫慂されてした事実の追認にすぎない。つまり、どちらも〈宣言〉と銘うたれてはいるけれども、作者自身によって規定された〈宣言〉の実質を備えたものとは受け取り難いのである。ここでいう〈宣言〉とは、みずからの前に投げ出された〈真裸かな運命の真実〉に目をそむけることなく、〈正面から真実にぶつかるだけの勇気〉を披瀝するものでなければならないはずだ。ところがBは、Aに対する友情に羽がい締めにされて、事態が解決するまで一言も〈宣言〉できなかった。つまりBはAに対して何事をも〈宣言〉することができなかったのである。〈宣言〉したのはだれか。それはY子である。Aに〈自覚を強ひられ、Bに〈真実に目覚めて行く〉ことを教えられ、やがてその二人の男たちの〈友情〉といたわりに満ちた饒舌のとばりを切りさくまでに成長したY子である。作中、彼女だけが〈宣言〉をあえてしたのである。「Y子の手記」の封印を切るまでもない。

〈ケフユク、コクハクスル、ソノツモリデマツテ〉

この電文の背後に、Aはまなじりを決した宣言者を直覚した。彼がたちまち〈真黒な絶望〉にたたきこまれたのは当然であった。

〈……その時私は突然B様を恋するやうになつたので御座います——許して下さいまし。こんな明らさまな申し方をするのを許して下さいまし。どんなに柔かく申しても申さねばならぬ事は同じでございます——〉

〈宣言〉とは、そういうのっぴきならぬものであろう。Y子もBも肺結核を病んでいる。[17] BがAに向かって〈君は悲しみを負いながら、僕等の斃れる所に立上らねばならぬ。〉と呼びかけているのは、二人がすでに重症だからである。死がすぐ背後に迫っており、彼らははっきりとそれを予知している。Y子は死の影を背負いながら、いやむしろ死というぬきさしならぬ人生の限界を背負うことによって、この〈宣言〉をあえてなしえたのである。〈生〉は〈死〉と抗抗することによって光芒を放つ、その輝きだけが〈真裸かな運命の真実〉を照射し現前する——と有島は考えていた。この観念は『石にひしがれた雑草』以降の創作過程においていっそうとぎすまされていくことになる。

〈人間の予知を幾重にも裏切る恐ろしい力——神的なのか悪魔的なのか自分は知らない——によつて、人が真実に目覚めて行くに従つて、段々苦しい運命に這入り込んでしまふ場合にだけ、本当の意味の悲劇は成立つのだ。〉

これはBの言葉である。運命の真実にめざめ、それにつきあげられ駆りたてられて、まっしぐらにみずから〈苦しい運命に這入り込〉まざるをえなかったY子の存在には作者の自己認識が深く投射されている。そして、そのありようが必然として結果した〈宣言〉の行為に、作家として出発しようとした彼みずからの宣言を重ねたのがこの作品の制作意図であったと思われるのである。

安川定男氏は、その主題を、〈近代的個人主義の自覚を前提として始めて提起された運命的な恋愛と友情との葛藤の問題を、漱石が提起したよりももっと明確な主題的意図のもとに取り上げて追求した〉作品である[18]ととらえた。山田昭夫氏は、ほぼそれでよいとしつつ〈自我に目ざめた一女性を中心にして、という言葉を冠することが必要であろう。[19]〉とY子主人公説を投影した部分的補強を提起した。また、福本彰氏は、

〈悲劇論（注・作中2月9日付書簡中の一場面）の中の「真実に醒めて行く人々」は、「宣言」ではA・B・Y子の三人、或いはN子を入れて四人を指すのであろうが、目覚めの中核を成すのはY子であろう。「Y子の覚醒」は、AがBの《もとで》成ることを望み、Bは唯それを見守もったのである。「Y子の覚醒」とは、

自己の《過去》を見詰める「心の成長」であろう。そしてその事こそ悲劇の核因であったのである。[27]〉と書いている。Y子を〈目覚めの中核を成す〉存在としてとらえ、そしてその内実を自己の過去を見詰める〈心の成長〉にあるとしているのは鋭い着眼である。諸氏の指摘をもとにして、ここではその主題を、自我にめざめた女性がみずからの意志に導かれて行為する主体に成長し、それゆえに彼女をそこまで高めてきたものを共どもに巻き込んでゆく運命の悲劇を描いた作品、とおさえておきたい。

『宣言』のモデルは、明治44～45年ごろ東北帝大の農学実科生であったTが作中のA、同じく予科生であったM（松本）がBであるという。二人とも独立教会会員であり、同郷のよしみもあって無二の親友といえる間柄だったということである。[28]また、Y子は当時小学校教員をしていたといわれる佐藤しげゐである。

〈…御暇の節小生の「宣言」は全部御通読を煩し度、事件の内容人物の性質等は全然モデルと異り居候へば、其辺も御含みの上御熟考の一助とも相成候はゞ幸甚に御座候。[29]〉

その後、大正7年1月に肺尖カタルと診断された佐藤に対して、有島は上京をすすめ医師を紹介、さらに二週間後には、その経過と消息を足助素一に報じている。[30]ちなみに、現在明らかな佐藤あて有島書簡は66通であり、個人別あて書簡数では、足助素一・有島安子・原久米太郎・有島生馬・吹田順助についで第6位、女性としては妻安子につぐ数を占めている。これも二人の親しい交誼の一端を示すものと言えよう。

ほかに、素材の一部に足助素一の恋愛が用いられていて、〈有島は最初、Aを足助・Bを自らに比して筆を執っていたが、やがて作家固有の創造の世界へ飛翔したもの〉であろうとする小坂晋氏の説[31]や、〈本文中の主要な人物BとY子がともに結核をやむのは、病妻と直接に関連して考えられる。不治の病とみなされていた結核を病む妻は、さしあたりY子であり、確実な死の近接についての怖れにせかれて、書きつづけている趣がみえる。[32]〉という瀬沼茂樹氏の見方などもある。これらは、感情移入や寓意の推測として興味深いが、モデル考としては前記の福士貞吉氏の説に従うのが妥当であろう。

A・B・Y子三者に仮託された作者の寓意として、坂本浩氏は、Aを武郎に、Y子を安子に、Bを彼女に迫る死の影になぞらえている。[33]執筆当時の作者の実生活を考えるとあながち唐突な着想とは言えないが、それならば少し視点を変えて、AとY子に作者の二つの顔が仮託されているとみてはどうだろうか。Aはこう書いている。

〈僕はY子に自覚を強ひた。今から思へば僕は自分以上をY子に強ひてゐたやうでもある。然し今となっては又もとの出発点に帰る事は出来ない。僕はもっと自分を責め鞭たう。而して彼女に強

ひた自分の目的を徹底させよう。……ルビコンは渡られた。僕は後ろを向くまい。〉

しかし、けっきょくAは動かなかった。Aは〈自分を責め鞭〉ちながら、ついにルビコンを渡ることができないでいる実生活における作者自身の姿である。あつい友情の持ち主であり、誠実そのものといえる〈智的生活〉者――きのうまでの（そこで終止符をうちたい）みずからの姿である。ルビコンを渡ったのはY子であった。B――〈本能生活〉の懐の中へいままっしぐらにとび込んで行く宣言者Y子は、きょうからの（そこから始めたい）当為としての自己の姿ではなかったか。

むろんこれは、作品の内部構造のみからの抽象ではない。有島にとって、作家としての自覚をもとにはじめて書かれたこの作品がその志向とどうかかわりあっていたかという点からの一つの比喩的な見方である。しかし、そうみなすことによって、巻末の〈鎌倉にて最初の稿を起し鎌倉にて最後の稿を終る〉という一句が、なまなましい意味をおびてくることになる。鎌倉は、〈もう我々も所謂 Life Work に落付くべき時期が到来したと思ふ。㉑〉と書いていた彼が札幌に別れを告げて〈Life Work〉のために選んだ仕事場、〈剣を秉るべき〉あらたな修羅場にほかならなかったからである。

注

① 講演記録『即実』による。佐々木靖章氏は、大正5年の妻と父の死（とくに妻の死）から著作のモチーフないしテーマとすべきものを発見・獲得して、大正6年に〈本格的著作活動〉を始めたとしている。〈作家活動の最盛期〉という意味ではその通りだと考えられる。（『有島武郎の作家としての自覚――「有島武郎著作集」を中心として』昭和43・7「日本文芸論稿」2号）

② この作品は明治43年10月に「白樺」に発表されたが、末尾に〈一九〇六年於米国華盛頓府〉と注記されている。

③ 足助素一宛書簡　大正3年3月29日付（Ⅷ・一六二～一六三）以下、とくに断らず巻次・ページを示したものは新潮社版全集によるもの、叢文閣版全集からの引用は〈叢〉と付記する。

④ 瀬沼茂樹『結婚前後の有島武郎――教授時代のうち㊤』（昭和41・9「文学」）

⑤ （Ⅷ・一九五）

⑥ 足助素一宛書簡　大正4年4月4日付（Ⅷ・一七四）

⑦ 吹田順助宛書簡　同年6月13日付（Ⅷ・一七四）

⑧ 引用は新潮社版全集（Ⅰ・五六～一六五）による。以下、作品からの引用はページをあげない。

⑨ 山田昭夫『「宣言」の内部構造』（昭和47・11「有島武郎研究」所収、右文書院）

⑩ 本多秋五『日本リアリズム最後の作家――有島武郎の文学』（昭和28・2「文学」）

⑪ 野島秀勝『解説　宣言』（昭和43・5「現代日本文学館」第15巻所収、文芸春秋社）

⑫ 小坂晋『「宣言」試論』（昭和43・11「国語と国文学」）

⑬ 鍵田研一『宣言解説』（昭和14・1「解説武郎創作全集」第1巻所収、新潮社）

⑭ 安川定男『有島武郎論』（昭和42・11、明治書院）

⑮ 注⑨と同じ。

⑯ 山田昭夫『有島武郎』（昭和41・1、明治書院）同氏は、昭和48年9月に『有島武郎・姿勢と軌跡』（右文書院）を刊行するに当たってそのあとがきに〈旧著はこの機会に絶版とする。〉とことわっているが、上記引用箇所は新版にも収録されている。

⑰ 山田氏はこれを、〈両人とも否応なく死の問題に直面せざるを得ない〉〈同じ宿命の共有感〉をもたらす積極的なフィクションであると見ている。同感である。

⑱ 注⑭と同じ。

⑲ 注⑨と同じ。

⑳ 福本彰『有島の「宣言」の悲劇性』（昭和45・4「日本文芸研究」）

㉑ 福士貞吉『「宣言」の人びと』（昭和45・2「北方文芸」）

㉒ 佐藤しげゐ宛書簡　大正5年9月21日付（Ⅷ・二三六）

㉓ 佐藤しげゐ宛書簡　大正7年1月22日付（叢Ⅸ・五一九）・同1月28日付（叢Ⅸ・五二二）、足助素一宛書簡　2月14日付（Ⅷ・二八八）による。

㉔ 注⑫と同じ。

㉕ 瀬沼茂樹『（宣言）解説』（昭和45・3、日本近代文学大系33「有島武郎集」所収、角川書店）

㉖ 坂本浩『（宣言）解説』（昭和26・9　角川文庫）

㉗ 注③と同じ。前掲引用文の直後につづく一節である。

2　背教の追認と思想的自立の志向
――『迷　路』

作家としての出発にあたって、みずからのうちなる声の命ずる行為にふみだす主体――当為としての自我を描いた有島は、つづいてその主体の思想的な自立をはかろうとした。『宣言』連載中に書かれた『サムソンとデリラ』およびその後の『大洪水の前』はともに聖書に題材をとったものであった。彼のキリスト教信仰の期間を札幌

独立教会の会員であった期間と見立てると、それは明治34年3月24日に入会してから明治43年5月に退会するまで[29]約10年間ということになる。もちろん、信仰のはじめと終わり――とくに終わりが教会離脱というようなできごとをもって明確な一線を画すことのできないのは明らかである。信仰生活の危機はすでにアメリカ滞在中に始まっていたし、キリスト教そのものの影響は教会離脱後もずっと続いて、彼の全生涯をおおうことになる。本多秋五が、主人公のキリスト教からの離脱が語られている〈一種の転向小説〉[30]と規定した『迷路』は、有島がこの問題をとりあげて作者としての思想的自立をはかろうとする意図のもとに執筆した作品であった。

この作品[31]は一度に書きおろされたものではなく、次のように書きつがれ、発表された。

「首途」――『迷路』序編　大正5年3月・「白樺」
「迷路」　大正6年11月・「中央公論」
「暁闇」　大正7年1月・「新小説」

これをみると、作品『迷路』は「首途」(以下、本編と対照する場合は序編とよぶ。)と、「迷路」「暁闇」(二編を併称する場合は本編とよぶ。)の二回にわたり、その間に約1年8カ月の中断をはさんで執筆完成したものであることがわかる。そしてこの序編と本編の間に、妻安子の死去(大正5年8月2日)、父武の死去(同年12月4日)があり、『惜みなく愛は奪ふ』初稿・『カインの末裔』などをはじめとする奔流のような創作活動が開始されているのである。森山重雄氏による有島の文学的生涯の区分[32]に従えば、『迷路』は彼の文学者としての自立のメルクマールともみなされる棄教の問題を、その生涯の第一期・第二期にまたがって執筆したことになる。

「首途」は、某年8月14日から9月5日にわたる10回の日記文の形式で書かれている。有島自身が在米中の一夏をフランクフォードの精神病院で働いたこと[33]、スコット博士やリリイなどの人物設定が事実に近いことなどから、この作品ははやくから自伝的な作品と読まれていた。『迷路』(とくに「首途」)を自伝的な作品とみる評を二三拾ってみると、〈これは、大体作者の自叙伝ともいふべきもので舞台は米国である。〉(井東憲『有島武郎の芸術と生涯』大正15年6月)〈「迷路」を氏から切り離して考へる時、左程価値高く見る事は出来ない。〉(北川トキノ『白樺派作家の研究㈢　有島武郎氏』昭和7年6月)〈「首途」は作者が米国に留学してゐた頃の暗欝な生活経験を大体如実に描き出したもの〉(鍋田研一『迷路解説』昭和14年3月)などがある。ほかに、大宅壮一(昭和4年3月)・伊藤整(昭和11年5月)・浅見淵(昭和18年9月)・本多秋五(昭和28年2月)・高橋春雄(同年6月)・山田昭夫(昭和41年1月)・高原二郎(同年)・安川定男(昭和42年11月)諸氏の評も、自伝的要素を色濃

く読みとる点で共通した部分をもっている。瀬沼茂樹氏が、Aは有島の友人阿部三四と有島を組み合せた人物である[36]としているのは異色であるが、方法の問題について論じたものではない。「首途」では、二カ月間の作者の精神病院における勤労の体験が博士との対面からその縊死を知って驚愕するまでの約三分の一にしぼって再構成されてはいるが、作品の書き出しになっている〈某年八月十四日〉の日記文が有島の一九〇四年〈八月十四日[37]〉の日記の書き出しと符合するところから始まる対応関係もみとめられ、「首途」を、あるいは大きく『迷路』全編を彼の〈自己内面の劇を追体験した[38]〉作品とみなすのは定説といってよい見方だと思われる。

それらの中にあって、西垣勤氏は、登場人物を検討して、Aは必ずしも作者の直線的な分身になっておらず、むしろKが最もよく描けているといい、〈（作者は）Aを否定した上で肯定している。Kを肯定した上で否定している。そしてAをKの上においている[39]〉と評した。また、川上美那子氏は、AとKの内的な関係を『或る女』の〈葉子と古藤の関係と同じ事情である[40]〉と書いている。いずれも、Aと作者をほとんど無媒介に重ね合わせかねない見方を脱しているものとして注目される。この作品の主人公はまぎれもなくAであり、作者のさまざまな体験が形象Aに投入されているけれども、本編においてKを設定したことと、のちに述べる積極的な虚構を設けたことによってかなりな程度までAを客体化することに成功したと言うべきであろう。

西垣勤氏は、〈（「首途」は）有島日記と関わりの深い作品である。フランクフォードの精神病院時代の具体的な生活が日記からほとんどそのまま移しとられていて、その生活をしている主人公の内面は日記とまるでちがっているという、奇妙といえば奇妙な作品である[41]〉と指摘している。そこには、フランクフォードの精神病院に一夏を過ごした明治37年（27歳）の日記の執筆主体と、作者としての思想的な自立をはかろうとしている大正5年（39歳）の創作主体を混同し、もしくはあいまいにしている諸説への批評の契機を認めることができる。

27歳の有島が精神病院の看護夫として働くことになった動機は何であったか。勤務した最初の日の日記に彼はつぎのように書いている。

〈何が故に余は此の如き所に来れる？　余自らさへ其深き意義を知らず。人をして好奇の心余りあるものなりと云はしめよ。されども余自らは疑ふ事能はず。神は余を茲に導き給へり。此頑なる僕を鞭ち給はんが為めに、将此無智なる僕を教へ給はんが為めに、将又此意志弱き僕を鍛ひ給はんが為めに。[42]〉

織田正信氏は、「有島武郎年譜」に、〈米国に於ける労働の真意は弟

生馬を欧洲に留学せしめんがためであつた。[40]〉と書いており、伊豆利彦氏が、〈すこしでも学費を倹約して、弟の生馬にヨーロッパで絵の勉強をさせたいとおもったことが、アルバイトをする決心をした理由ですが、精神病院の看護夫になったのは、人里はなれた孤独の中で静かに人生の問題や社会の問題を考えたいとおもったからでした。[41]〉と書いているのもその影響を受けたものと思われる。しかし、有島がそこで働くことになった直前に、〈壬生馬君はいよ〳〵望まれし方針（㊟画家の道を選ぶこと）に進まるる由大賀々々、真に御喜び申上候。……願くは益々精進事の堂奥に入られんことを祈り居申候。[42]〉と書いているのは、弟を留学させるためのアルバイトという推測にはむしろ否定的な資料になろうかと思われる。彼は、働き始めて数日のち、家族にあてて、

〈私がこんな処を選びました理由は、米国に於ける慈善事業の一班を観察したい為め、且つは己れよりも弱きものに幾分の助力を与へて飢ゑたる心を満足せしめんとの、申さば利己的の考もあつたのであります。[43]〉

とも書いている。また、すこしさかのぼると、〈独立教会は小生が此地に於て屢々誇り語る所に御座候〉と札幌の宮部金吾にあてて書いた書簡の一節に、〈小生は何か仕事を見付けて此夏休みを有益に過し得ん事を望居申候。[44]〉とも記している。この、〈有益に過し得ん事〉とは、精神生活の面、すなわち信仰生活の試練――見神の渇望から出たものにほかなるまい。

滞米生活二年目を迎えた有島は、キリスト教信仰の上での大きな危機に遭遇していた。

〈日露戦争が故国で爆発した。……私の思索はこの大事件によつて一層緊張した。「お前は本当の信仰上の変身を経験してはゐない。」――是れがこの一年間に於ける私の思索の最後の断案だつた。[45]〉

これは彼自身の後年の回想である。しかし彼が信仰の問題について思索し、〈最後の断案〉を下すまでにたどった内的な経緯は、この回想文中に縷々述べられているところをていねいに読んでみても、どうにもすっきりしないところが残る。それは、この回想の中では、〈主よ我が眼を開き給へ。耳を開き給へ。主に向ひて責め問ふ事なからん為めに、眼を開き耳を開き給へ。[46]〉というように衷心より神に祈った当時の自己の一面がすっかり切り捨てられたところからきている。その結果、複雑をきわめた内面の劇の軌跡に、渦中にあった彼がかざしていた光源とはまるで違った位置から光があてられることになり、ふしぎに静まりかえった、単調な世界を現前することになっている。

日露開戦によって、彼はいやおうなしに異郷にあって異邦人に囲

繞されている自分、日本人である自己の再認識を迫られることになった。これは彼にとって、ひとかたならぬ驚きをもたらすものであった。渡米当初以来、彼の意識においては、アメリカおよびヨーロッパは信仰における故国だったからである。先に引いた回想の中に彼は離教の理由の一つをこう書いている。

〈日露戦争によつて基督教国民の裏面を見せられた。日露戦争の勃発と共に突然に起り来つた問題は、基督教国対異教国のそれだつた。[47]〉

しかも、フランクフォードで働くうちに断絶感はますます深まった。彼は、看護夫として働く同僚の中に、〈余を呼ぶにジャップを以てし、嘲弄の語を弄し、其相互に語る所卑下にして聞くに堪えざるもの[48]〉のあることに怒りと悲しみをおぼえた。

しかし、当時の有島は、〈基督教国民の裏面〉とキリスト教そのものをなお混同してはいない。むしろ神に祈り、神を慕うことによって失望に堪え、危機を乗り切る力を得ようとつとめたのであった。当時の日記には、〈神は余を茲に導き給へり。[49]〉（7・19）という最初の日の記述をはじめとして、聖書からの引用（7・21）、聖書を読んだ記録（7・24／8・2／8・3）、牧師の資格について考える（7・27）、安息日の礼拝に出席した記述（7・31）などのほか、

〈路暗くして身孤なり。云ひ知らぬ淋しさを感ぜざるにあらず。されどもかゝる時にこそ基督の御胸の温かさ祈りとなるまでに心には沁むれ。[50]〉（7・25）

など、数箇所に神を求める切実な祈りの姿が刻まれている。

その祈りの声の背後に背教の地すべりは始まっていた。むろんそれは、その過程においてはあからさまな言葉になってあらわれるべくもないものであり、行間に見え隠れしている片言隻語からおしはかるほかないのであるが――。野島秀勝氏は、9月12日の日記の一節、とくにその結末に書きつけられたイザヤ書の一句、〈嗚呼、悲しきかな、われ破滅せり。〉に武郎の悲痛な絶叫がこめられている[51]としている。さらに遡って、8月7日日曜日の讃歌会からの帰途庭園を散歩した際の〈心空しくして祈ること能はず。[52]〉という記述、同9日に午前・午後とくりかえしダンテと聖書を読んだにもかかわらず〈何故か心満たず。[53]〉とある箇所、キリスト教の教えとゲーテの考え方を対比して〈自己を聖化して自己の中に天国を見出すにあり〉とする後者に〈多少の観察なからずとせず。[54]〉と書きとどめている箇所なども隠徴な背教の軌跡を示すものとして、右の傍証になると思う。キリストとゲーテの対比が書かれているのは8月14日であるが、この日の日記の冒頭がほとんどそのまま「首途」の書き出しに用いられていることはすでに何度か指摘されている。

野島秀勝氏は、有島がこの病院で働くことになった動機を、〈「珠のやうに抱いて」渡った自らの信仰を試そうとしたこと〉にあった[35]としている。これは、安川定男氏の、〈自分自身をもっと孤独で困難な状況の中に連れ込むことによって自分自身を試し、信仰上の問題に血路を見いだそうという意図〉にもとずくものであった[36]とする指摘からはやや後退しているが、野島氏の「珠のやう」な彼の信仰はそこで無残にくだける。〉という断案は明快である。キリスト教国へのあこがれをも抱いてアメリカに渡った有島はその裏面を見せつけられてしたたかに失望し、信仰そのものまでが揺らぎはじめるに至った。そこで彼は、なんとか信仰上の問題に〈血路〉を見出せないものかと、勤労と静思の場を求めて精神病院で働くことにしたのであった。ところがその結果は志とまるで逆になって、ついに信仰が〈無残にくだける〉結果に終わってしまったのである。

信仰からの離脱を堕落・自失ととるか、蘇生・自立ととるかは各人の志向によって見方の分かれる問題である。有島のこの苦闘の期間を、彼の生涯にわたる精神遍歴のうちで、そのベクトルが負に転じた転回点と見ることもできようし、また逆に正に転じたそれと評することもできるだろう。それは評者の人生観にもとずく、任意のことがらである。ところで、有島自身にとってはどうであったか。当時（明治37年）の有島日記は、それを堕落・自失の負い目と観じてそれにあらがおうとする主体の告白と詠嘆に満たされている。そして、後年（大正8年）の『「リビングストン伝」第四版への序』の論者の視座は、それを蘇生・自立の萌芽として謳歌する位置にある。それでは、いま、『迷路』を執筆する作者有島の主体はいずれの側にあるのだろうか。

『迷路』の自作解説は全集に収録されておらず、談話筆記と思われる次の一節が伝えられているだけである。

〈『迷路』は題目が示す通り元より迷ひの表現です。……私の目ざしたいのはあの迷ひの中に現代青年のよき迷ひを描かうとした事です。あの時代を通らなければ新しい肯定の時代は生れないと思つたのです。[37]〉

これは、作品完成後の所感である。したがって、厳密には執筆時点における創作意図そのものとは断定し難いが、序編「首途」の第一ページに〈僕は祈りたい。然し祈れない。〉と書き、〈総ては若い情熱の仕業だつたのだ。僕は女を恋する代りに神を信じたのだ。〉と書きついでゆく主人公を設定した作者主体は、やはりこの所感の中へ吸い込まれるように収斂してゆくのである。つまり、『迷路』執筆時期の作者は、あの時期を〈新しい肯定の時代〉への関門としてとらえなおす立場、――日記の主体とは裏返しの位置に座を占めているのである。以下、作品をたどりながら検討を進めていきたい。

「首途」が日記の形式で書かれているのは、それが内面観照とその吐露にふさわしい形式として着想されたのであろう。10回の日記文の形式で書かれたこのオラトリオでは、スコット博士との交わりが重い調べで歌いつづけられ、その随所にリリイへの思慕の情が甘美なアリアとして挿入される形になっている。スコット博士を支配した運命、さらに言えばその運命をただし得なかった神への愛憎尽かしが、Aを神に背かせたということになろうか。Aと博士とのかかわりは一日も欠かさず描かれている。第一日目（8・14）にAが博士の専属看護夫に任じられたところから始まって、博士の印象（8・17）、〈A！　お前は基督信徒か〉という博士の不安げな質問（8・18）、夜半に博士が狂燥状態に陥った事件（8・21）、博士の沈黙・瞑想と苦悶（8・23）、博士がその弟の死から受けた苦痛と予定説にうちのめされた話（8・24）とつづいてゆく。

スコット博士の弟というのは、農場を経営していたが雹害によって作物をすっかりだめにしたところへ経済恐慌による銀行の倒産で追い討ちをかけられ、進退きわまって自殺したのである。博士には、苦境にあった弟に励ましの言葉一つかけてやらなかったことが痛切に後悔された。彼はたえきれなくなって教会に行ったが、予定説の説教に暗示されて、〈貴様はカインと一緒に永遠に呪はれた霊魂だぞ〉という悪魔の声を聞いてしまう。神は愛だ、愛は義しい、

義しいゆえにその道をまげようとされない、だから罪を犯してしまった自分はもう許されないのだという〈永遠の呪咀〉にまといつかれて博士は発狂した。

〈博士に予定説を説いた牧師とは一体何者だ。図書館の塵の中から引きずり出して来た貴様の神学は、一人の人間を狂気に誘ひ込み、死に陥れようとしてゐるのだぞ。冷やかな言葉で行ふ殺人犯……〉

と、Aは激昂する。しかし、彼の働きかけにもかかわらず博士の強迫観念はいよいよ昂じ（8・29）、その憂鬱は極度に達し（8・31）、Aが病院を去る前夜、日記をつけているところへ素足のまま寝衣を引きずって現れ、罪を犯したらもう償いはできないと言い残して去って行く（9・2）。そして9月5日、Aは列車の中で博士が縊死したという新聞記事を読んで驚愕する——。

作中のスコット博士は、有島がフランクフォードの精神病院で世話をした同名の人物をモデルにしたものである。「首途」の幕切れに描かれているように、列車の中で博士の縊死を知った当時の彼は、〈思はず隣座の女学生を驚かす迄の大声を発し、やがて、

〈主よ、爾は彼を此世より奪ひ去り給ひぬ。彼の為めには此上なき幸福なりき。余が為めには……余が為めにも亦。……余は多く此事を書き続くるの勇気なし。[8]〉

と、うなだれたのであった。しかし「首途」のAは、

〈僕の首途は血祭で呪はれた。或は血祭で祝福された。どちらでもあれ僕は活を入れられたやうな心持がする。〉

とうけとめている。神にひざまづき、罪を悔い、恐れ、やがて神を恐れ、運命を呪いつつ縊死した博士の生涯の終わった地平を、Aは善悪美醜あらゆる力を集めて生きぬく、もっと自由なもっと厳粛な神なき世界への〈首途〉と見たてたのである。この正負の転換が、あえてこの時期を〈新しい肯定の時代〉への首途としてとりあげさせた要因であろう。

『迷路』本編の舞台はボストンとその周辺である。Aが何らかの形で交渉を持つ人物として、弁護士Pとその妻、社会主義者K、大学教授Mとその二人の娘ジュリヤ、フロラなどがいる。この中の、ホイットマンに心酔しているPというのは、有島がフランクフォードの精神病院で働いた翌年1月10日から寄寓することになったピーボディという実在の人物をモデルにしたようで、〈素性の知れぬ女性を携へて帰り来る。彼女は一泊せり。……余は呆然として云ふ所を知らず。〉というような体験も実際にあったことが日記からうかがわれる。[59] 社会主義者Kは金子喜一である。〈夜　金子君と共にボストンなる社会主義者の集会に到る。……実に種々雑多なる人集まれり。余は彼らの面貌を熟視して快に堪へざりき。〉という記述にはじまって、かなり親しい交際がしばらく続いていたことが日記にしるされている。[60] ピーボディのホイットマン理解、金子喜一の社会主義実践がどの程度のものであったかの詮議とはかかわりなく、有島が在米当時の精神遍歴をふりかえったとき、その神離れの過程でピーボディと金子から受けた衝撃は無視できぬものであったはずで、PとKがこの作中においても重要な位置を占めているのは自然なことと納得できる。

わたくしは、つぎの三つの設定を本編における積極的な虚構として作者が意図していたものと考える。

(1)AとP夫人の情交→P夫人の懐妊。

(2)Aに対する学費仕送りの途絶。

(3)AがKのために通夜をすること。

むろん、結果としてはその比重に大きな軽重が生じており、(2)と(3)については作者は意図した通りの結果を収めることができなかったものと思われる。しかし(1)はひとり歩きを始めて、『迷路』を文学作品として定立するかなめになり得ている。野島秀勝氏は、〈彼が盲動する自己の性欲をあからさまに語るには、妻と父の死が必要であったのだ。『迷路』のなかでおそらく唯一の虚構と考えられるPの妻とのただれた情交が描かれるのはその後半においてだが、その部分は妻と父の死後執筆されたものである。[61]〉と書いている。序編と

本編の間の二年近い時日の意味はたしかに大きい。野島氏はそれを、妻と父の死によって〈性欲をあからさまに語る〉条件がととのった期間とみている。妻や父に対してばかりでなく、母に対しても弟妹に対しても、実生活における有島が心配りを忘れぬ人であったことは周知の事実である。けれども、〈肉欲の悪魔が瓜を磨いで襲ひかゝつて来た〉こと、〈それと戦つて大抵は敗かされた〉ことは抽象的な独白としてではあるがすでに序編に書かれているし、それ以上に問題だとも言える〈僕の父は二度ほど狂人として取扱はれねばならぬ状態に陥つた事がある〉というような、直接に父にかかわることも〈あからさま〉に書いている。写実的な文体で描くことだけが〈あからさま〉だと割切るわけにはいかないだろう。

この時日の意義は、彼が『カインの末裔』を書き上げることによって、〈形あるものにモチーフを仮託することから、モチーフを表現するにふさわしい形をつくるという新しい創作方法を獲得した点に読みとられなければならない。[18]〉とわたくしは考える。つまり、AがP夫人と肉体関係を結び、そこから生じた問題に傷つけられ懊悩するというプロットの設定は、〈盲動する自己の性欲〉を記憶の中から呼び起こしてあからさまに語るための手つづきとして必要だったわけではなく、主人公Aを往時の作者自身から引き離してひとり立ちさせるための方法の一つとして着眼されたものと考えられるのである。むろん、妻と父の死によって有島が作家として成長し、〈ただれた情交〉をいっそう迫真的に描き出す力量を獲得した一面のあることも作品のできばえの上から無視できぬ事実である。

Aは P夫人との情交を告白してPに借りていた部屋を追い出され、Kの下宿にころがり込む。やがてジュリアに対する思慕の情がつのり、有頂天になったところへP夫人から懐妊したという便りが届いて、たちまち絶望の淵に突き落とされる。Aは生まれてくる嬰児を扼殺する場面を幻想する。道ならぬ欲情の結末を扼殺して解決しようとするよりも、堕胎などの着想の方が自然ではないかと思われるのだが、彼はひたすら殺人の方を考える。そして、とつぜんスコット博士の遺言を思い出すのである。

〈お前が基督教徒な以上は意識的に悪いと思ふ事は露程でもしてはならない。お前は金輪際その償ひをする事が出来ないから。〉

ここで序編が本編にかぶさってくる。圏点を付した部分は、序編に〈A、お前はいつか基督信徒だと云つた。私は信徒たるお前に一言だけ云ひ残しておく事がある。〉とあった部分である。かつて有島は、ほぼ同じような言葉をスコット博士から言い残されたのであった。これは事実である。[19]しかし、いまなお作中のAはキリスト教徒なのだろうか。序編では、Aがスコット博士の専属看護夫として、

〈「A！　お前は基督信徒か」
いよ〳〵病房へ帰らうとする時、偶然のやうにかう彼は僕に尋ねた。僕は偶然にも――多分病人の気休めといふ心も何処かにあつたのだらう――「さうだ」と答へた。〉

という問答をしている。だから、スコット博士がAとの離別をひかえて、作中でもさきのような言葉をおくったことは理解できる。しかし、〈偶然にも〉〈病人の気休めといふ心も何処かにあつ〉て、キリスト教徒だと答えておいたAが、信徒であるからには守らねばならぬという戒律に呪縛されて、〈ぞつ として奇妙な悪寒を水月のあたりに感じ〉たのはどうであろうか。Aは嬰児の扼殺を、人間として許せない、また自分としてはできないと観念したのでなく、〈基督教徒〉として、〈金輪際その償ひをする事が出来ない〉罪だと直覚したのである。Aはスコット博士の死を〈血祭〉として出陣したはずであったのに、ここで神の影にたじろいでいる。

Aは、ジュリヤへの愛とP夫人の胎児がともどもに成長してゆくというジレンマの中で、Kがいぶかしがるほどの憂欝に沈んでいく。しかも、〈彼の心はP夫人の胎の内にある肉魂に対して、やむにやまれぬ愛情を感ずる〉ようになってゆく。菊池寛は、この作品を全体としてはかなり高く評価しながらも、〈主人公の胎児に対する愛情に就ては、自分は何等の理解も持ち得ない。従つて主人公の苦悶の或る部分が、自分にとつては偽りらしく思はれる。[64]〉と批判した。未生の胎児への愛（それもまったく愛情を感じない女性の胎内にいる）というのは、ジュリヤへの愛との間におかれた主人公の内的葛藤を高めるための設定であろうが、菊池評にある通り誇張だというそしりをまぬかれない。そのような誇張をまたずとも、P夫人との情交・懐妊という虚構は、Aを試練する彫の深い作品展開を可能にするものであったのだ。

第二の虚構は、みずからの労働によって報酬を得て、それによって生きたい、〈家〉から自由でありたいという作者の理想をAに実現させようとしたものである。

〈然し自活といふ事は彼が空に考へてゐたやうな生優しいものではなかつた。……然しそれは彼に三つのいゝ結果を持つて来た。一つは自分の生活全部に主となつた事。二つは自分と周囲とに本当の関係が成立つた事。三つは図書館で働いてゐるM教授の令嬢の姉なるジュリヤといふ画家と研究室で一緒に働く事。〉

送金が途絶したのは、Aが日本の雑誌にたびたび発表した過激な論文が家族や親戚の間に波紋を起こしたからである。彼はここで一番はじめに〈親から本当に独立する事〉をあげている。『カインの末裔』に流れ者を設定した作者が、その思いをここでもAに仮託しようとしたものと見ることができよう。親から独立し、〈自分の生

活全部に主とな〉ることは、若い日の彼自身にとってのうしなわれた真実であった。二つ目の結果はそれに付随したものであり、三つ目は彼がジュリヤと近づくことになる作中の伏線としても有効である。しかし、自活の苦しみそのものはついに描かれずに終わった。

第三の虚構は、『迷路』全体のしめくくりに当たるものとして終局部に設けられている。瀬沼茂樹氏によれば、Kのモデル金子喜一が結核を病んでいたのは事実であるが、その死は帰国後のことであったという。[35] したがって、有島がこの作品の中に描いた二つの死――スコット博士の縊死とKの病死――のうち、前者が事実に拠ったものであるのに対して後者は作者の設定した虚構だということになる。この虚構の意図はどこにあったのだろうか。

同時代の豊島与志雄は、臨終のKのことばによって、AがP夫人の妊娠の誤信から覚めた心持ち、Kの死に対する心持ち、その後の彼の問題などが〈わけもなく片附けられてゐる〉として、「暁闇」の結末――ひいては『迷路』全編の結びに不満をもらし、続編を期待した。[36] Aを息詰まるまでに苦しめてきたP夫人懐妊が根も葉もない虚言であったことがKの一言で明らかになり、その翌日にはKがあっけなく死んでいく。何事も金銭に換算しなければ納得せず、女性をも物質視するのだと広言してきたKが、臨終に、わずかに残した金を自分と交渉のあった売春婦に形身として届けてくれとAに託する。そして、〈フロラはいい〉と言い、しばらくして〈君はフロラに…〉と言い、〈人間は〉とまだ何か言いたげにしながら絶息してしまう。事柄の展開からみれば、たしかに唐突の印象をまぬかれない結び方である。

おそらく、作者の意図としては、スコット博士の死が神なき世界への旅立ちに手向けられた〈血祭〉であったのに対して、Kの死はAが習俗的な呪縛からも解き放たれて自己内面をいっそう拡充し、〈成就〉に向かってさらに一歩を進める里程となるべきものだったのではあるまいか。そうであってこそ、序編の結末と『迷路』全編の結末はたがいに照応しあい、〈よき迷ひ〉を通りぬけた〈現代青年〉が〈新しい肯定の時代〉のとば口に立つ、という創作意図は〈成就〉されるのである。ところが作者は、みずから設けた虚構によって、予期せぬものを見てしまったのだ。

Kの死んだ夜、ひとりKの棺を見守っていたAは、空にちりばめられたかすかな星の光以外は〈たゞ底深い暗黒だけ〉が彼をとりまいているのに気付く。

〈この総てのものゝ空しさはどうだ〉

殉教者のように、異郷で力の限り闘ってきたKはろくに看病もされないで死んでしまった。あれほど自分を苦しめてきたP夫人の胎児というのもあっけなく氷解してしまった。善も悪も、美も醜も、

一呼吸のうちに飲みこんでしまう永劫の闇だけが周囲をとりまいている。その〈どす黒い空虚が彼を戦かした。〉――序編において、〈躊躇は無益だ。成就か死か……〉と自己激励のうちにその独白を終えたAは、本編にはいって、P夫人との情交・親との断絶・Kの死を体験した。そしていま、Kの遺体を前にして〈総てのものの空しさ〉をじっとかみしめているのである。人間存在そのものをひたひたとおし包もうとする〈どす黒い空虚〉をかいまみたAは、それゆえいっそう痛切に夜明けを、自由を、成就を渇望することになるか、その〈空虚〉に身を投げていくことになるか、それともう一度神のもとに帰ろうとするか、いずれかの道を選ばなければならない。おそらくこの作品は、すくなくも作者にとっては、そのままには〈新しい肯定の時代〉への通路とはなりえなかったのではなかろうか。

神は信じうるか――。この命題を、なぜ神は遠くなっていくのかと自己を鞭うちながら追い求めていた日記の執筆主体にかえて、有島はその空しかった営為の極北に立って出発するAを設定した。林一郎がつとに、〈「迷路」の中から明瞭に何故有島がクリスト教を去ったか、と云ふことの原因を引き出すことは非常に困難である。[37]〉と書いたのも、西垣勤氏が〈奇妙な作品〉だともどかしがったのもおそらくそこからきたのだろうと思われる。背教の過程を描くべくして、その顛末報知ないしは追認におわったのである。虚構を用いた本編におけるAは、序編でひとりごちていた姿から成長して迫力のある存在になった。それは有島の作家としての成長とその力量を物語るものである。しかし、彼がここでなしとげようとした根源的な対決は回避されたと言わなければならない。

神なしに生きうるか――。その命題は、神離れの過程が描かれなかったために、結果として不問に付されることになった。そして彼は、予期しなかった〈どす黒い空虚〉をAとともに見ることになった。虚構の方法が、作者の深部にあるものをゆり起こしたのである。

有島が「迷路」を書き上げたのは大正6年10月20日、「暁闇」を書き終えたのは同じ年の12月14日である。その間、11月19日に〈余は如何なる要素に依り、如何なる態度に於いて創作をなす乎〉という「新潮」誌の企画に応じて『四つの事[38]』という回答を寄せた。彼はそこに、①淋しいから、②愛するゆえに、③さらに愛するために、④自身の生活を鞭うつために、創作するのだと答えている。①の〈淋しいから〉創作するというのは、創作のいとなみが見失われた真実を〈しっかりと純粋に回復〉する手だてになるという意味であり、②は、愛によって自己のうちに孕んだものは〈出来るだけ多くの人の胸に拡がらう〉とする拡充性を持つゆえに筆を執らざるをえないという趣旨である。これらは、いずれも作品『迷路』の場合に

あてはまる。この作品は、滞米第二年から翌年にかけて（13年前）の見失われようとする真実の回復を志向した作品であり、スコット博士を呪縛したキリスト教の形骸を蝉脱し、金子喜一の倒れた地平にその思想と生涯を〈孕〉みつつこえてゆく一個の人間を、みずからの曙光を迎える願いをこめて書かれた作品であった。

Aは彷徨の果てに〈どす黒い空虚〉のひろがりを見た。彼はそれを〈黎明前の闇〉として来るべき朝にそなえようとする。しかし、作者自身は、はたして夜は明けるのかという不安とおののきを抑えることができなかったのではあるまいか。彼は、あらたな方向に向かって〈人生の可能〉を追求し、それによってその〈空虚〉と対抗しようとしていた。

注

㉘ 上杉省和『有島武郎年譜訂正若干』（昭和40・6「北海道文学」）

㉙ 注⑩と同じ。

㉚ 引用は新潮社版全集（Ⅰ・三二三～四七二）による。

㉛ 森山重雄『有島武郎における生の二律性認識』（昭和44・6「実行と芸術」所収、塙書房）

㉜ 明治37年7月19日（Ⅸ・四三一）から9月16日（Ⅸ・四七五）まで。

㉝ 瀬沼茂樹『留学前後の有島武郎 下』（昭和39・12「文学」）

㉞ 日記（Ⅸ・四五六）

㉟ 野島秀勝『迷路』（昭和47・11「有島武郎研究」所収、前出）

㊱ 西垣勤『観念の青春――「迷路」論』（昭和46・6『有島武郎論』所収、有精堂）

㊲ 川上美那子『有島武郎の文学――「或る女」論のための序章』（昭和47・5「情念」4号）

㊳ 注㊱と同じ。

㊴ 日記　明治37年7月19日（Ⅸ・四三二）

㊵ 新潮社版全集所収。（Ⅹ・五三七）

㊶ 伊豆利彦『有島武郎』（昭和40・6　福村出版）

㊷ 家族宛書簡　明治37年7月14日付（Ⅷ・七三）

㊸ 同　　同年7月23日付（Ⅷ・七五）

㊹ 宮部金吾宛書簡　同年6月14日付（叢Ⅸ・四八）

㊺『「リビングストン伝」の序――第四版の序』（Ⅵ・六六）

㊻ 日記　明治37年3月29日（Ⅸ・四三〇）

㊼ 注㊺と同じ。（Ⅵ・六九）

㊽ 日記　明治37年7月21日（Ⅸ・四三五）

㊾ 注㊴と同じ。

㊿ 日記（Ⅸ・四三七）

㊿ 注㉟と同じ。

(51) 日記（Ⅸ・四五二）

(52) 日記（Ⅸ・四五三）

(53) 日記（Ⅸ・四五七）

(54) 注㉟と同じ。

(55) 注⑭と同じ。

(56) 鐘田研一『迷路解説』（昭和14・3「解説武郎創作全集」第2巻所収、前出）に引用されたものによった。初出は「スネーク」という雑誌であるという。刊行年月不詳。

(57) 日記（Ⅸ・四八一）

(58) 日記（Ⅸ・四九三）

(59) 日記（Ⅸ・四八七）ほか。

(60) 注㉟と同じ。

(61) 小稿『「カインの末裔」成立過程試論』（昭和42・3「同志社国文学」2号）

(62) 日記（Ⅸ・四八〇）

(63) 菊池寛『一月の文壇』（大正7・2「早稲田文学」）ただし注(57)と同じく鐘田文所引のものによった。

(64) 瀬沼茂樹『社会主義者金子喜一――有島武郎との関係において』（昭和39・10「日本文学」）

(65) 豊島与志雄『新年の創作を評す』（大正7・2「文章世界」）山田昭夫氏もそれを支持し、つづけて〈「どす黒い空虚」の底面をもっと掘り下げるべきだった〉としている。（注⑯と同じ。）

(66) 林一郎『ブルジョア文学の再検討』（昭和3・12「文芸戦線」）

(67) 『四つの事』（Ⅴ・三〇一～三〇二）

(68)

付記 文中に引用したもののほか、最近出された関連論文に、坂下知子『有島武郎「迷路」論――半自伝的小説「迷路」の問題性』（昭和47・10「藤女子大　国文学雑誌」12号）

江頭太助『有島武郎「迷路」論のためのノート』（一）～（三）（昭和47・12、48・3、同・9「北九州大学開学二十五周年記念論文集」ほか）

同　『有島武郎「迷路」論のこころみ（一）――未定稿「首途」の構想』（昭和49・8「北九州大学文学部紀要」11号）

さらに、石丸晶子『一キリスト者の棄教の周辺』（昭和48・1～9）

川上美那子『金子喜一考』（昭和48・3）などがある。